

浄土

1984-3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一週一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和五十九年二月二十五日印刷 昭和五十九年三月一日発行

第五十卷

三月号



寺参り彼岸桜に笑い声

家族揃って明かるく仲良く暮らすことの、なんとすばらしいことか。和氣藹々とした一家団欒の光景は、だれの心をもなごませる。

しかし現代のように喧噪な、百千万化の慌しい時代社会にあっては、一人一人が無事に健やかに生きて行くことが、いかにもむずかしい。そして家族ともなれば、血が繋がったり、縁を結んだとしても、仕事や学業、家事などのそれぞれの役割の中で、時に諍い、心を分かつような場合もある。また物理的にも、生活の場を離れ別れて暮らすことも多い。そんな中で、家族全員がみんな元気で、一緒に生活できることがありがたいのである。お互いに、心を寄せ合い、手を取り合って、足らざるところをよく補ない合って、生きて行くことが大切なのである。

表掲の拙句は、その家族が、自分たちのいのちを与えてくださった亡き先祖の精霊を想って、彼岸参りの供養に訪れた寺の境内での一コマである。ほころびはじめた早咲きの彼岸桜を映した子供たちの笑い顔が、両親のやさしい暖かさを写していた。笑い声を聞いて、思わずその方に、目と心を奪われてしまった。そして私自身も、暖かなごませていただいた。おそらくは、亡き先祖の方々の精霊、み仏の光明があまねく家族をおおいつくし、暖かいほほえみに顕現されているのであろう。その暖かい恩恵に、私も浴したのである。

三輪車彼岸桜の根本から

片桐和子

願わくは、いつもいつも、咲き染める桜の花のようなほほえみの中にありたい。そして、その笑顔を子供たちに伝えて行きたい。

(勝崎裕彦)

三月号



斯の願若し剋果（こっか）せば、大千
 百億に感動すべし。虚空のもろもろ
 の天人、当に珍妙の華を雨（ふ）ら
 すべし。

——『無量寿経』四誓偈

目次

法話

- 四天王寺の西門に立つ……………山口 諦 存……(2)
 彼岸会の心……………水 野 善 朝……(7)
 気持良く生きる……………石 川 孝 之……(12)

《世相評談》

- 彼岸寂靜……………須 藤 隆 仙……(24)
 <ずいそう> 春の便り……………旭 俊 正……(29)

心のはなし(上)

- 母と子の素晴らしい会話—しかし!!……………梶 原 重 道 ……(18)

- エッセイ 早春三題……………木 下 隆 一……(42)

- 寄 稿 私自身のこと……………御堂河内 四市……(34)

- 《詩集紹介》霧林道義詩集『平地林』……………(38)

- ◎現代詩コーナー 笑っていてほしい……………坂 田 文 三……(40)

- 浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(36)

- <表紙裏> 一月一句「寺参り彼岸桜に笑い声」

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

四天王寺の西門に立つ

やまぐち
山口 諦存

(浄土宗開教振興協會事務局長
明石市光明寺住職)



春が明けて、弥生三月の声を聞いて、桜花を誘う新芽若芽に新しい息吹きを感じるこの頃です。やがて彼岸法要の鐘が響き、春はようやくやく私どものまわりに訪れて来たのです。関西地方では昔から春秋を通じて、彼岸といえど大阪の一心寺、四天王寺の法要が最も賑かであり、善男善女の列は天王寺駅から、長々と続き雑沓を呈します。

法然上人は文治元年（一一八五）の春、四天王寺の慈円僧正の招きをうけて参詣せられ、西門の辺り、茶臼山の近くに「荒陵の新別所」という、草庵を結んで止住せられ、やがてここに一心寺が開創されたと、伝えられています。

上人は遙かに難波の海に真紅に輝きつつ落ちる日を、西門から拝まれ、日没の彼方に西

方極楽浄土への往生を願ひ、称名念仏せられました。

西門という石の大鳥居には、西に向けて掲げられた「釈迦如来転法輪所 当極楽土東門中心」の篇額があり、この大鳥居の南前には「大日本仏法最初四天王寺」と雄渾な筆跡の大石柱が建っています。

篇額の銘文は聖徳太子の詩と伝えられ、聖地を結界する四門のひとつ、明神形の鳥居であつて、発心門ともいわれています。

銘文の「釈迦如来、転法輪所」は、釈迦如来の法輪を転じ給うの所と、現在形に読むのがならわしであるとのことでありまゝです。それは聖徳太子が、お釈迦さまが今現にここに在して説法し給うとの、深いご信仰の現われであるとされています。

「当極楽土、東門中心」は、極楽土の東門の中心に当ると読み、この西門は極楽浄土の東門の中心に当るといふことであり、この西門が極楽浄土の東門に、正対しているという

のであります。

この篇額は珍しく、箕^みの形をしています。これはすべての人々を救いとて漏らさない、阿弥陀仏のご本願の心を表現しているのとこととであります。

太子は「一度もこの靈地に詣でて、一華一香をささげんものは、必ず浄土に引接せん」と誓われました。

この西門の辺りから「夕陽が丘」の名が生まれましたように、観無量寿経に説かれています、日の没するさまを眼前にして、遙かに西方阿弥陀仏の極楽浄土を想う、日想観が行われるようになり、中日の西門には人びとが群参して、念仏の声が絶えません。まことにゆかしい彼岸風景といえましよう。

法然上人のご伝記、勅修御伝には、四天王寺に関わる上人と明遍僧都のことがしるされています。

明遍はこの頃の仏教学者として、高名を馳せていました。ある日法然上人の著述されま

した、有名な選択集を読み、新仏教としてさすがにその主張、論拠はよく理解することは出来たものの、いささかその教えは、念仏の勝れている立論にかたよりがあると思つて、寝た夜の夢に、四天王寺の西門に、無数の病者が病み臥して苦んでいます。そこへ一人の僧が粥を入れた鉢から、匙をさし出して一人一人の病人の口に、粥をあたえて歩いていきます。不思議に思つて傍らの人に、「あの僧はどなたでしょうか」と尋ねますと、「あの御僧は法然上人です」と答える声に夢が覚めました。明遍が思いますのに、わたくしは選択集を読んで、その内容がやや片寄った教説である、上人を批判したこと戒められた夢に違いないと、思い当りました。

上人は人間の人がらを知り、今の時代を知つた御僧であられる。病人のありさまは、健康な時には柑子、橘、梨、柿などのような、果汁のあるものを食べるけれども、次第に病が重くなり後には身体が衰えてくると、この

ような果物も喉を通らなくなりわずかにおもゆで喉をうるおすばかりで命をつなぐこととなり、選択集に上人が一向に念仏の易行道を勧められたことは、このことであるに違いないと気付きました。現在は末法の濁世である。お釈迦さまの教と行はあるけれども、証すなわち悟りを開くことは至難となつた。現在はお釈迦さまの昔から遠くへだたり、今日に生きる自分の姿を見れば、重病人の類いではないか、救われる道は念仏のおもゆより外にないと知り、専修念仏の教えに帰依し、ついにその名を空阿弥陀仏と改めました。

明遍の夢を見たところが四天王寺であると思つたことも、聖徳太子が仏法を弘められた最初の寺院であり、御父君欽明天皇のために七日間の念仏をつとめられたことなど、念仏の信仰につながる深い縁があるからであり、西門の鳥居の篇額にも「釈迦如来、転法輪所、当極楽土、東門中心」と書かれています。わが日本に生をうけた人は、この念仏のみ教え

に帰依しなければならぬと結ばれています。
また、上人が四天王寺に止宿していられる時のことでありました。西門施粥の夢を見た明遍が、善光寺へ参詣の道すがら、上人をお訪ねし面謁を許されました時、ご挨拶も申しあげず出会いがしらに、「どうしたならば生死の迷いを離れることが出来ましようか」と問いかけました。

上人は、「南無阿弥陀仏と唱えて往生するより外に道はないと思います」と答えられました。すかさず明遍は、「誰れでもそれは解りますが、念仏を申している間に、心が散乱し、妄念の起りますことを、どうすればよいのでしょうか。これをお聞きしたいのです」と迫りました。

上人は、「この世に生きているものは、心が散乱しないことはありませんまい。煩惱のかたまりでありますわれわれ凡夫が、どうして妄念を止めることが出来ましよう。このわたくし源空も到底力及びません。心は散り乱れ妄

念はつぎつぎと競い起りますとも、口にお名号を称えますれば、阿弥陀さまのご本願の力によつて、必ず往生が出来ます」と教えられました。すると明遍は、「そのことを承りたいために参ったのです」といつて、ひとことのご挨拶もせず、すぐさまさつと出てゆきました。

信仰の悩みを胸に抱いて、法然上人に解決を求めた明遍のひたすらな求道心には、世間の習いも礼儀もない、全く生命を賭けた、火花の散る初対面の問答でありました。疑いが晴れて退出する身も心も、どれほど軽かったことでありましようか。

明遍の没常識とさえ思われるこの態度を、人々は返って尊く思いました。

お部屋に戻られた上人は、「心をしずめ妄念を起さずに、念仏を申したいと思うことは、生れつきの目鼻をとつて、念仏しようと思うようなものである。ああ、大変なことである」と仰せられたとのことであります。

明遍は深く上人の教えに帰依し、毎日数珠の早繰り念仏百万遍を、数回も繰り返す行者となりました。

法然上人の滅後はそのご遺骨を生涯首にかけ、高野山の草庵に籠り、三十年間一歩も外に出ず、専心念仏の生活を通して、八十三歳の生涯を終えました。この人こそ高野の明遍僧都と、敬われた念仏者でありました。

今日、高野山奥の院への参道に、法然上人の御廟がありますが、ここに明遍僧都が生涯護持した、上人のご遺骨が納められていると、このことでもあります。

煩惱妄念の起る凡夫の性をそのまま肯定し、けがれた心のまま、ひたすらに念仏せよと教えられました、祖意の忝けなさを思い、陽春の彼岸会には心穏かに、改めてしみじみと念仏するひとときをもち、今日をあらしめられた祖先の恩徳を謝し、自らの信仰を更に深めたいと思うのであります。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B6判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願って、大人たちからのすばらしいプレゼントにご利用下さい。

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)一―八三四七

(法)

(話)

彼岸会の心



暑さ寒さも彼岸まで

よく言いふるされた言葉であり、子供のころから耳なれた言葉である。四季の移ろいはつきりしている国土に住んでいるだけに、この単純で平凡な言葉が、その単純さや平凡

みずのぜんちょう
水野善朝

(長野市往生寺住職)

さを遙かに越えて真実味がある。わけても雪国で生活する人々にとっては春が待ち遠しいものであり、春のお彼岸がくるのをあこがれにも似た思いで待っている。一方、ことさらに暑い夏を経験したりすると、早く残暑から

抜けだして、涼しい秋が望まれ、秋のお彼岸の声を一日も早く聞きたいと思ったりする。彼岸はまさに日本人の一年を単位とする生活の中で、季節の節目を実感させてくれるときでもある。

彼岸——彼の岸と書く。この言葉にはどんな意味があるのであろうか。

彼岸は実は到彼岸の略だとされる。到の一字が略されている。到彼岸というのは、サンスクリット(梵語)のパーラミターの意識とされている。

最近、般若心経の解説書が二十種類余も発行され、ブームを呼んでいる感があるが、これとても抄略した名称であり、くわしくは「摩訶般若波羅蜜多心経」という。「摩訶」は大、「般若」は智慧、「波羅蜜多」が到彼岸という意味であり、「心経」という部分だけが意識の語である。他の部分はすべて音訳、すなわち原語の発音にもっとも近い読みをもつ漢字に当てはめたものである。したがって、

ふだん省略した名称で呼んでいる般若心経の経名の中に、実は彼岸の語が含まれているのである。「波羅蜜多」がパーラミターを表わす。

パーラが彼岸を意味する。彼方、あちらの方という意である。英語のパラダイス(理想郷)のバラと共通する音節なのである。彼岸とは此岸に対するものであり、悩みや苦しみや濁りの多い此の世、人間世界に対して、彼岸の世界は仏の世界であり、罪けがれない悟りの境地を示すものである。そのような仏の世界、悟りの境涯にミター・到達することが彼岸の意である。

浄土門では、仏の世界を西方浄土にありとする。阿弥陀のおわします極楽国土がそれである。

仏、韋提希に告げたもう、汝および衆生は、まさに、専心に、念を一処に繋けて、西方を想うべし。いかに、想いをなすやと

言わば、およそ、想いをなすとは、一切衆生の生盲にあらざるよりは有目の徒、みな、日没を見る。まさに、想念を起し、正坐し、

西に向いて、諦らかに日を観ずべし。心を

堅住し、想いを専らにして、(他に)移さざ

らしめ、日の没せんと欲して、(その)状、

懸鼓のごとくなるを見よ。すでに日を見お

わらば、目を閉じても開きても、みな、

(日没のかたちを)明了ならしめよ。これを

日想となし、名づけて初観という。(岩波

文庫本より)

これは観無量寿経の中の日想観の一節であ

る。日没の彼方に、すなわち西方の彼方に仏

さまの浄土のあることに想いを馳せることを

教えている。観経の中では、十三の観想を説

いているが、その第一に述べられているのが

この日想観である。

善導大師は、これを観経疏正宗分定善義の中

ことにどういう意味があるのかを説明している部分を引用してみよう。

……心を住して日を観ぜしむるは何に意かあるや。答えて曰く、これに三意あり。一には衆生をして境を識って心を住せしめんと欲す。方を指すことと在ることあり冬夏の兩時を取らず。唯春秋二際を取る。其の日正に東より出でて直ちに西に没す。弥陀仏国は日没する処に當って直ちに西の方十萬億刹を超過す。即ちこれなり。二には衆生をして自の業障に輕重あることを識知せしめんと欲す。云何んが知ることを得ん。心を住めて日を観ぜしむるに由る。云々：三には衆生をして弥陀の依正二報種々の莊嚴光明等の相の内外照曜して此の日に超過すること百千万倍なることを識らしめんと欲す。云々：

善導大師の説明は精緻を極めるので、その

全文を紹介するわけにはいかないが、彼岸の行事が彼岸会という形で、春分と秋分の日に設定されたのは、太陽が真西に沈むので、アマダ仏の極楽国土を望むのに、もっとも正確な方向を定めることが可能であるからであった。日の沈む彼方を見つめることによって、往生の想いを湧きおこすように示されたのである。

日本の日没も美しいが、大陸の日没はそれにも増して壮大な美しさがある。わたしはかつてインドでそれを見た。アジャンタを訪れた後、オーランガバードへ向う途中、日が暮れた。その時に見た夕陽のすばらしさは、今も脳裡に浮かぶ。

大きな円形をした真赤な太陽が、地平線に触れる。雲も赤く染まり、夕焼けが見渡す限りに拡がっている。大地に触れた赤い円盤は下の方から徐々に欠けて行く。目に見えて沈んでいく。そのスピードは早い。もう少し待ってと叫びたくなる。半円になる。あたりは

ずっしりと薄暗くなり始める。七分目、八分目とその姿を消していく太陽、まもなく大地の中に完全に沈んでしまう太陽、それでもなお大地の一点からその余光を天空に向けて放っている。また明日もあることを約束するかのように、その輝きをしいに弱めながら、静かに隠れて行った。夕闇がわたしたちを包んだ。アッという間のことであった。

この光景を目にしたとき、わたしは即座に観経に説かれている日想観に想いを馳せ、むべなるかなと思った。それは理窟ではなかった。学問とか合理的思考とかを超えて、全く無条件に、西方の彼方にアマダ仏の国土を想わないではいられなかったのである。

経典に述べられていることが、インド大陸の地に立つて、身をもって実感できたのであった。それまでの経典への理解が、頭の中でのみのものに過ぎなかったことを思い知らされたのである。

わたしのところは、海拔六〇〇メートル前後の山腹の高台に寺が位置している。ちょうど彼岸のころになると、彼岸桜が芽吹きはじめ、うぐいすが鳴き始める。時には近く、時には遠く、時々刻々に所を変えて聞こえてくる。その声にまじって、めじろなどの小鳥たちの声もひびいてくる。阿弥陀經に説く共命鳥の声もかくやとばかりに感じられる。

お彼岸の中日は曜日にかかわらずなく休日となることも手伝って、墓参りにみえる人も多い。お盆ほどではないが、先祖に思いを寄せる人々が多いことも事実だ。お供えする御馳走は彼岸だんごであったり、おはぎであったりする。人々の気持が、たとえわずかな期間だけにしても、御先祖様の方向へ向くことは喜ばしい。

長野の善光寺は、わたしのところから一キロメートル足らずの地にある。戦前から戦後の十年位のころは、春秋を問わずであったが特に春の彼岸期間中は、遠方の地から参詣に

訪れる団参が多かった。日本が産業構造の中に占める農業のウェイトがまだ比較的重かった時代のことである。経済成長に伴って、農業社会は年とともに縮小されていった。そればかりか、農業の形体そのものが変った。農機具や薬剤の発達普及は、かつての農繁期というものを解消してしまった。春の彼岸は農閑期であったから、勢い農家の人々はこの時期に旅に出ることが可能だった。だが今は違う。農繁期という画然としたものが無くなったと同様に、農閑期も特にあるとは言えない昨今である。彼岸中の善光寺への参拝団体は往年の比ではないのが、実はこのごろの現象である。

人の流れは年と共に変わる。しかし人の心の動きは、振り子のように行ったり来たりすることはあっても、先祖を想い、往生を願う気持は変って欲しくない。彼岸を迎える度ごとに反省したいものである。

(法)

(話)

気持良く生きる



一、気持良く生きたいと願う心

「入りボタモチの明けダンゴ、中の中日ガ

石^{いし}川^{かわ}孝^{こう}之^し

(横浜市正覚寺住職)

ツタガタ」などと申しまして、お彼岸のお中日には、まぜごはん、五目ずしを作ってお仏壇におそなえし、家族もそろってなごやかにこれをいただき、お墓詣りをするお家も、ま

まだまだ多いのです。私の寺でも、朝早くから夕刻まで、お墓詣りにみえる方々が次々と絶えません。中には、お彼岸中に二度も三度もお詣りされる方もあります。私の寺の近くにある大きな霊園も、入口から車の出入りを禁止して、参道は人の波です。石塔の開眼供養のために、ご一緒したお施主さんが「和尚さん、世の中みだれたというけど、こんなに墓地を立派にして、皆こぞってお詣りにみえて、どのお墓もお詣りしていない墓は見当らない。日本人は、やっぱりくさってはいないし、世界でも優秀な国民ですね。」「お墓をきれいにしてお詣りを済ませると気持が良いですからね。」

本当に同感です。色々な国々を旅した思い出を脳裏にえがきながら、お彼岸という良い時期を、この様に心暖まる行事に育て上げた日本の祖先に頭の下る思いで、今建ち上げたお施主さんの墓地へと人波をわけて歩きまわした。他人が信じられなくなった社会とは別世

界の暖かい世界がそこにはある。参詣の人々は互いに見知らない人々であるが、互いにその気持ち良い心が交流している事を感じます。この雰囲気は、確かに文字通り「彼岸」の世界です。私達日本人は、こうした行事を通じて気持ちよく生きたいと願っているのだと思います。

二、生活の物差し

お彼岸になりますと、どのお寺さんでも、「彼岸」の意味についてご法話があると思います。そしてこの事だけは宗派の別なく、同じものです。これはお釈迦様時代の言葉、パーラミターを到彼岸と訳したり、その発音に近い漢字を当てはめて、波羅蜜とも音訳しています。皆さんは、九州の六波羅探題とか六波羅蜜寺とか般若心経の般若波羅蜜多という言葉をご存知ですね。

私達の人生を、川を渡ることに喩えまして、

欲望にふ まわされ、苦しみの絶えないこの世界を、こちら岸、即ち此岸（がん）、そして人生の窮極に至る理想の世界をかのかの岸、即ち彼岸（がん）、と申しまして、この岸からかの岸に渡るのが人生といえましょう。人生は川ではありませんから世渡りという事になります。氣持よく生きる生き方とも言えましょう。六波羅蜜即ち、氣持良く生きるための物差しとして六つあるということです。川を渡るではありませんせんから、サンズイを取除いて「六度」とも訳されます。

一、布施（ふせ）…全てのものを愛する心

二、持戒（じかい）…約束やきまりを守る心

三、忍辱（にんにく）…辛抱して、長く続ける心

四、精進（しょうじん）…努力して、長く続ける心

五、禪定（ぜんじょう）…心を広く、平静心を保つ心

六、知恵（ちえ）…正しい教えに従う心

この六つの物差しを持って生きることをお勧めします。人生を氣持良く生きるための反省の項目として、今日一日をふり返り、「自分は、慈悲深く生きただろうか、忍耐強く行動したか、根氣よくやっているか……」というふうに生きるための物差しを持って生きていくかどうか、という事で長い年月には、相当地に生き方も変って来るのではないかと思われまします。そしてその事は、人柄をも変えて行きます。特に子育てには大層役立つ教えたと思えます。

三、現代に求められるもの

お釈迦様の教えは、八万四千の法門と申しまして、大層多くの經典となつて残っている

のですが、それはお釈迦様の正覚きざりの内容を、師匠から弟子へと研究を重ねて残されたものです。その歴史的流れの中で、右の六つの徳目は、初期の時代には、一番の布施について繰り返し説かれました。そのうち一・二世紀頃になって、特に般若経系統の經典の中で、忍辱や精進が加わる様になり、更に後世、次第に増広されて、知恵、禅定、持戒、これを「三学」と申しまして、仏教では大切な教えですが、これが加わりまして、六つとなったのです。

これは意図的に付け加えたものではなく、ごく当然の教えの流れとして固まって来たものといったらよいでしょう。さて、何百年という歳月の流れの中で、この六つに固まって来た六波羅蜜というものを、私はつくづく現代に置きかえられるのではないかと感じます。特に、現代人に求められるものは何かと考える時、実に明確にクローズ・アップされる事ばかりだからです。

人間らしく生きる根本になる布施、言い換えれば「慈悲心」にどうしても必要なもの、それは、忍耐と精進でありましょう。私事で申訳ありませんが、私は、小学校、中学校、大学と教員生活が続け、住職となるため大学を辞めてから、お壇家の総代さんの経営する幼稚園の園長を勤める事となりまして、幼児から大学生まで一貫して接することが出来ました。その全てを通して、一口に言える事は忍耐がないという事です。中学生でも授業に集中出来る時間は十数分といわれ、大学生でも百分授業を集中して受ける学生は皆無といわれています。物事に集中出来ないで、その事が満足する筈はありません。

そして更に、集中出来た事を長続きするところが出来なければ、物事は達成出来る筈はないのです。

一生懸命、集中して授業を聴いてこそ、その内容がわかり、更に自分の解らない所がわかり、そこを解明した時にこそ、そんなに気

持の良いことはないのです。

四、集中力とオーラル・レッスン

私は野球のことはあまり知りませんが、プロ野球の有名選手は、もはや一流中の一流人で、高度な技術を身に付けているでしょう。にも拘らず彼等は、最も基本的な練習を大事にして、ランニング、キャッチ・ボール、バットイング等、これに集中し、更にオーラル・レッスン。繰り返し練習とでも言いましょうか。毎日、毎日、繰り返し繰り返し練習するという事です。唯単に繰り返しても駄目で、一球入魂と言われます。これこそ、忍辱と精進でありましょう。

その欠陥は幼稚園で既に見られます。毎日幼稚園に通わせて、この園は、字を教える、音楽教育が良い、等々親は変化を求めて安堵します。毎日、同じ様な保育では満足しません。また一つ、また一つ、知識をふやせば満

足します。しかし、これがあやまりのもと、耐えられないのは、親の方でしょう。

おはようございます。ありがとうございます。すみません。おやすみなさい——等々、いわば、ごく日常的なオーラル・レッスンの中から、気持良く生きる精神の基礎は育まれて行きます。

五、人生も同じ忍辱と精進

私がよく行くお寿司屋さんの店内に、忍と大きく書いた布のノレンが掛けています。その様な土産品が売られていたから買って来たとも言えますが、店主は、商売は忍の一字だと感じたからこそ求めたのでしょう。商売は、アキナイとも言われ、飽きない事、即ち精進である事をいましています。

そうした精神が店内にみなぎっている店は気持が良い。又来ようという気になります。多分お店の人達も気持よく働いている様に思

われます。勿論そうした人生には、知恵も、
禪定も、持戒も大切なことだと思われま
すが、その基本的精神として、忍辱と精進が根
底にあつて、ごく当然ながら、三学の教え、
即ち知恵、禪定、持戒が伴つて来る様に思わ
れます。

六、浄土宗徒の気持良い生き方

私達は、縁あつて浄土宗の教えにめぐりあ
いました。前にもお話しましたが、お彼岸は
何宗でも、およそ仏教宗派であるならば、こ
の時を大切にします。そして六度という豊か
な世渡りの教えについてお話しました。

私達は、この教えに従つて、気持よく生き
ようと思ひます。その様に思ふ私が気持良い
からです。皆様は、誰の迷惑にならないよう
に自ら努力し、精進して日々の糧を得ている
ことでしょうか。他人には迷惑をかけずに、生
きている自分であるけれども、もっとこの事

を掘り下げて考えてみたらどうでしょうか。
朝、昼、晩といただいている食べ物も、米と
いえ、さしみ、天婦羅、皆かつては生きてい
たものです。住んでいる家も、着ているもの
も皆生命いのちを持つていた。私はそうした犠牲の
上に、毎日を生きています。そうした全ての
ものを生かして来た太陽も、土も雨も、私を
取りまく無限の恵み、無数の命「アミター」
をいただいて生きている私であると感じとつ
た時に、その生かす仏、無量寿仏に對して、
有難い事、「南無阿彌陀仏」、申し訳けない
事、「南無阿彌陀仏」と申さざるを得ないの
です。

彼岸の六度を毎日の生活に投影し、要約す
るならば、おはようからおやすみまで、全て
素直に「南無阿彌陀仏」と申して生きる事が、
正しい教え、浄土宗徒の気持良く生きるやり
方なのでございます。

心のはなし(上)

母と子の素晴らしい会話

——かし!!

かじ わら じゅう どう
梶原重道

(社)全国保護司連盟副会長
堺市超善寺住職

バス停で、三才ぐらいの坊やが、足許をはいま
わる、アリを面白がってながめていた。
「アリさんは、どこへ行くの?」

「アリさんも、おうちへ帰るのヨ」
そのうちに、坊やはアリを足でふみつけ始め
た。

母親は、自分も面白がって、「ホラここにもいるヨ」とけしかけていました。

これが私の「気になるメモ」の中に、加えておいた母と子の一光景であります。

恐らくこれをお読みいただいた皆さんにも、こんな風景を思い浮べていただけるのではないでしょうか。

あるいは、直接幼い日の思い出であるかもしれないかもしれません。

実際にはほえましい、若い母と子の会話であり、ありありと誰の目にもすぐ浮んでくる光景であります。

アリさんはどこへ行くの？

幼い心の観察であり、またやさしい想いではありませんか。

アリさんも、おうちへ帰るのヨ

これまたその幼い心に答えた、若い母の素晴らしいことばであります。

この会話の中には、幼い子の夢をこわすことなく、そのままにお祈の世界につないだような希望をもたせた、美しい母と子の一つに融けあった心の世界がひろがっていると思うのであります。

まことに羨ましいまでの光景であり、会話なのであります。

問題は、これほど素晴らしいよい会話ができていながら、アリを足でふみつけはじめると、「ホラここにもいるヨ」とけしをかけるということであります。

私は決して、この母を恨むのでもなければ、また腹立たしく思うのでもありません。正直いって、これがわが可愛い子に対する母のいつわりのない心ではないかと考えるからであります。

平静に考えてみますと、「アリさんもおうちに帰るのヨ」とこんな素晴らしい会話のできた母のことばとは全く、裏腹に、わが子のアリをふみつけてよろこんでいる子の戯れに、「ホラここにもいるヨ」

とけしかけてふみにじらせてやるいじらしいまでの母の心をおもうのであります。

本来ならば、「そんなことしたらアリさんが可哀想なのヨ」とやさしくさとすことができるはずでありましょうし、またそれだったらすべてに満点の母にちがひありません。

子の戯れにひきづられて溺れてゆくのが、母というものではないでしょうか。

私がここで考えたいことは、可愛い我が子のために母というものは、さらに親というものは、もっとひろく人間というものは、「アリさんもおうちに帰るのヨ」というような、とても素晴らしいことばがでる半面に、そのアリをふみにじらせるような大きな罪を犯しているという事実についてのことであります。

いいかえますと、これがほんとうの人間というもの的心ではないかということを、この母と子の会話をかりて、冷静に考えてみたいということでありま

す。

われわれ人間というものは、常にこのような母の矛盾を、しらずしらずの間にくり返しているものであるという事実を、時には静かに考えるべきでありましょう。

濁悪動乱の世の中で、敢然と念仏弘通のために、わが浄土宗をお開きいただいた法然上人のような偉大な高僧であられながら、ご自身は常に凡愚の人間であられることの、たえまない御自覚と御反省であられたと拝するのであります。

いつのまにか、みんな思いあがってしまつて、自分ほど偉い者はなく、自分の意見だけが正しいものと過信してしまつていふような、いまの世の状況を見ると、どこにほんとうの安らぎがありませんか。

現代こそ、法然上人の心を拝し、謙虚にわが人間性にめざめる他はありますまい。

そのためには、何よりもまづわがありのままを静かに見究めることでありましょう。

智恵第一の碩学とまで賞賛せられた法然上人であ

られながら、決してそうした榮譽や名声に酔われることなく、どうしようもない人間としてのわが心のありのままの姿を、きわめて大事に見究められたのであります。

口には経をよみ

身には仏を礼拝すれども

心には思わじ事のみおもわれて

ひとときも とどまる事なし

何というもったいないまでの尊いおことばでありますし。

学徳兼備の高僧であり、念仏の元祖としての法然上人であられながら、このようなおことばを残されているではありませんか。

徳高ければ高いいだけ、学深ければ深いいだけ、わが心の底につもる煩らわしい心に、たえずお気づきになられたのであります。

そのどうすることもできない心の煩らいや禍わいの、ありのままの姿を、ありのままに見つめられ、ありのままに気づかれたのであります。

口でお経で読めば、殊勝に読んでいると思ひこみ、身で仏を礼拝すれば、恭敬に礼拝していると思ひこんでいるのが、そもそもわれわれ凡愚のあさましさというものであります。

しかし実際は、心には思ってはならないさまたまなことが思い出され、一時もとどまる事のないのが、人間の心なのであります。

このどうすることもできない、わが心のありのままの心、ありのままの心として素直に見究めることが、法然上人の念仏に近づかせていただける第一歩なのであります。

善いことを願ひ、悪いことはさけたいと念じながら、どうしようもないわが心の煩らいに、真正正銘気づかせていただけるからこそ、わが力ではどうすることもできない自分であるからこそ、ほんとうの導きがほしいのであります。

「アリさんもおうちに帰るのヨ」と、立派なこと

はいえても、すぐそのあとから、「それからここにもいるヨ」と殺させてしまうのであります。

どれほどとりすまし、どれほどいい恰好をしてもすぐ剣けてしまふ、そんな心を抱いている人間であることに、真剣にめざめさせていただくべきであります。

そんな矛盾の中に生きつづけている、わが心のありのままの姿にめざめることを、法然上人は、わが「機を知る」ことであると教えられたのであります。

わが機というものは、そんな矛盾のくり返しにありけくれているではありませんか。そんなどうすることもできないわが機だからこそ、何らかのお導きや、お救いをねがいたくなるのではありませんか。

おもえば、わが機とは誰が何といおうとも、愚鈍なもので、その愚鈍さは自分ではどうして絶ちきつてしまえるでありませんか。

法然上人は、このような人間の悲しさを、わが力量ではなく、阿弥陀さまのお慈悲におすがりになられたのであります。

ゆきとどかない人間としての行動や、きらびやかな服装をまといとりすまそうとすることや、心にもないあやことばを使ってその場をとりつくろうとすることや、清く正しくと願いながらも、その実は正反對の、いまわしい心のわきでることなど、何一つまともに真実の道の歩めない自分であるからこそ、阿弥陀仏のお慈悲に救われてゆかねばどうにもならないのが、人間というものの本根なのであります。

所詮こんな人間の力量で、いったい何ができるでありませんか。

法然上人は、だからただ念仏を申すことによつて、そのお力で少しでも正しく、清く生かしていただく道をおしめくださったのであります。

泥沼のような濁悪の生活の中で、その生活そのままの中から、美しく気高く咲く蓮の花の、一筋の道こそ法然上人の念仏申すことのみ教えであります。

何かにつけてまさに濁悪の現代だからこそ、美しい花をさかせていただきたいものであります。

◇◇◇『浄土句集』欄への投句のお願い

—及び俳文等の寄稿のお願い◇◇◇

『浄土』誌本文中のオアシスともいふべき、『浄土句集』欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この『浄土句集』欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

- 一、内 容 俳文、句会便り等の随想
- 一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度
- 一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

《世相評談》

彼岸
寂
靜

銀幕往年のスーパースター、ワイズミューラーが、一月、亡くなった。
ワイズミューラーというよりは、ターザンといったほうがピンとくる。
少年時代、ターザンの映画に夢中になったのは、筆者だけではあるまい。



須^す藤^{どう}隆^{りゅう}仙^{せん}

(函館市称名寺住職)

ワイズミューラーはシカゴで生まれた。第二次大戦前の一九二四年パリで、二八年アムステルダムで、それぞれオリンピック大会に水泳競技で五個もの金メダルを獲得し、六十七の世界記録を樹立した人である。

一九三一年から映画俳優に転じ、MGMの

ターザン映画第四代目主役として活躍した。いろいろな役者がターザンを演じたが、やはりワイズミュージアラーが一番人気があった。第一作の『類人猿ターザン』（一九三二年）が大ヒットし、それを皮切りに『ターザンと人魚』（一九四七年）まで、計十八本のシリーズに出演し、すばらしい肉体美を披露した。

一九〇センチ、八〇キロの見事な体である。バリ五輪での百メートル、四百メートル自由形の二種目制覇をはじめ、四年後のアムステルダム五輪でも百メートル自由形に優勝、一九二二年には百メートル自由形で初めて「一分の壁」を突破している。五十ヤードから八百八十ヤードまでの水泳レースで六十七の世界記録を樹立し、一度も負けたことがなかったというから、まさに超人的水泳選手であった。

映画では、たくましい体と独特な叫び声で密林を駆け回り、猛獣たちを自由に手なずけて悪と闘い、少年少女のアイドルとなった。

しかし、このスーパースターも娑婆の荒波を泳ぎ切るのは容易でなかった。

プロデューサーとの興行収入分配をめぐるトラブルで、コロンビア映画へと移っている。『ジャングルジム』シリーズに主満したまではよかったが、すばらしい肉体もフェニックス（不死鳥）のようなわけにはいかない。

やがて銀幕を去り、往年の名声を生かして健康食品の販売などに携わっていたそうだが、取り巻きにだまされたり、数度離婚するなどして、無一文になってしまった。

やがては盗みをして捕まるというニュースが報じられて、世界中の人たちを驚かせた。その人生は波乱万丈であり、晩年の不遇は哀れなものがある。

七年前に心臓発作で倒れ、病身となった。ハリウッド郊外の映画テレビ病院で療養の日々を送っていたそうだが、老人ボケがひどく、深夜に病院中に響きわたるターザンの雄たけびを上げていたという。その雄たけびは、彼

自身がかつて考え出したものであったそう
だ。一代のスーパースターが死ぬとき所有し
ていたものは、その雄たけびただ一つであっ
たのだ。七十九歳であった。

「起伏」という言葉がある。『広辞苑』の
説明を見ると、「栄えたり、衰えたりさまざ
まな経過のあること。盛衰」とある。

人間の生活はまさに起伏そのものである。
人間だけではない。家も、村も町も都市も、
そして国家も、世界も、みな起伏そのものの
歴史である。

しかし、仏教は、その起伏を超えた世界を
教える。それが彼岸（仏の世界）ということ
であらう。

ところで、その起伏を超えるとは、いった
いどういうことなのであらうか。少しく仏教
の教義で説明してみるならば、起も伏も滅す
るということ（生滅滅已）、起も無く伏も無
くなる世界であらう。

だが、そんなことは現実世界に望めるであ

らうか。起伏のない世界は見方によっては、
枯渇した世界、死んだ世界、であらう。

果して仏教は死んだ世界、枯れた世界を目
指しているのであらうか。

彼岸は悟りの世界である。悟りとは死枯の
境をいうものであらうか。仏典に具象化され
る仏の世界（彼岸）は、決して死枯の世界では
ない。それは永遠の活動の世界であり、永遠
の生命の世界である。

してみると、起伏を超えるとは、起も伏も
同時に肯定することであらう。

仏眼は常に起も伏も見きわめて下さるもの
である。

私たちは凡夫であるけれども、努めてこの
み仏のものの見方を真似る必要があるであら
う。少しでもよい、瞬時でもよいから、その
ようなことが必要であらう。

今日の世相を考えると、あまりにも人々は
片方のことより見ていない。起の世界には鶴
の目鷹の目で寄ってたかろうとするが、伏の

世界に対しては目を覆おうとしている。否、覆うているのである。

現在、発展途上国における子供たちの哀れさは想像を絶するものがあるようだ。過酷な労働を強いられている子供たちは七千五百万人に上るという。エジプトでは十六歳以下の子供たちが溝掘りの工事をしたり、建設資材を運んだりしている。トルコの親たちは、自分の子供を乞食にするために不具にすることもあるという(米ニューズウィーク誌)。ユニセフ(国連児童基金)の『世界子供白書』を見ると恐ろしい。発展途上国で一日四万人の乳児が死んでいくという。三分の一は栄養失調で、三分の一は下痢による脱水で、三分の一は病気である。何の事もわからず、ただ生まれたとたんに苦しみの連続で、しかもその苦しみの意味さえもわからずに死んでいくのである。

私たちはこういった現実をもっともって考えなくてはならない。

起の世界を知ったならば、伏の世界を知らなくてはならない。楽の世界を知ったならば、苦の世界を知らなくてはならない。

経済大国日本の、その日本人の精神構造はどうなっているのだろうか。万事金の世の中で、金がなければどうにもならないが、だからといって、金だけで人生を全うできると言うのも間違いである。膨大な資産をつくったと見られた故児玉誉士夫も、借金が残る豪邸が差し押えられているという。「残されたものは借金だけ、家族の生計をどう支えるかが私の使命」といった秘書の言葉がほんとうだとすれば、経済ということもまた、ただに空しい脚体をもつものであることが悲しい。三月はお彼岸の月である。お彼岸は周知のとおり、仏教の彼岸思想によって意義づけられた行事である。

中村元博士の『仏教語大辞典』に、彼岸と彼岸の行事とを説明して、次のようにある。

「①かなたの岸。②理想の世界。理想の境地。迷いの此岸に対し、さとの岸。③究極の見地。④絶対完全。⑤六境のこと。⑥彼岸会のこと。日常の苦しい生活を脱し、楽しい精神生活を送るために、仏法を聞き、行ないを正しくする日。春秋二季。」

このような勝れた教説を頂ける仏教徒の有難さをつくづく感謝せずにはいられないが、しかし、この教説の基本には、実現の凝視ということがある。否、むしろ、彼岸の教えこそは実現の凝視そのものである。

現在の社会を見るならば、私たちにはあまりにも、やらねばならぬことが多すぎる。しかし限られた凡夫の能力に、どれほどのことが出来るであろうか。

それであるならば、まず、どんなことでもよい、自分で出来ることを、一つでも二つでもやることである。

最後に私ごとで恐縮だが、私は今、私の住

む地方の歴史を勉強して、それを人々に紹介し、その中から人生を学び、社会を学び、さらには経済、政治といった分野にまで参考となるべきことを学び得るように、いささかの努力を欠かさないようにしている。ために著述、講演など、極めて多忙な日々である。新聞や雑誌にも執筆を頼まれ、テレビ出演の依頼も多くある。

現在は否応なしにメカ(機械)万能の世の中になってきている。子供たちにしても、今はメカを通して、かろうじて友達との関係を保っているようだ、と指摘されている(朝日新聞『子ども新時代』)。

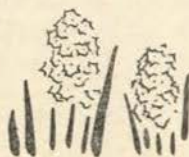
そんな中で、微力ながら、ほのぼのとした人間性を歴史の中から学びたいというのが、私の念願なのである。

寂静の彼岸は、努力の彼方にこそあるのであるまいか。

(丁)

(す)
(い)
(そ)
(う)

春の便り



春といえは若さと希望のシンボルであるが、私如き平々凡々に、只春秋を重ねて来ただけのものにとっては「春の便り」という講題を如何に表現するかに迷ったが、ともかく思いのままに書かしていただくことにした。

「念々不捨者」の誓願称名の裡に、万事万象を春の便りとして頂ける念仏者の倅せは、味わえは限りなきほどに最勝の歓びであり、これ一重に元祖法然上人出世の御恩寵である。

あさひ
旭

しゅん しょう
俊正

(江津市西晩寺住職)

新年明けた一日、檀家勤めから帰って門をくぐると、本堂から、さわやかな詠唱の声が流れて来る。御忌和讃の調べである。その日は寺の詠唱会の新年初会合の日であった。

承安五年の 春なかば

都の花に さきがけて

濁世を救う 声あらた

専修の門は 開かれぬ

と。第一節の歌詞であるが、御忌法要が近づく頃となれば、私もこれを口吟みながら、時折歓喜の念に胸ふるわせて、法然上人よりの春の便りと受取ることである。

さて、世情による春の便りは、初月年賀の便りから始る。頌春、迎春、と唯二字だけ書かれた年賀状を頂く。元旦早々が春だという感触、厳寒ながらも清新の陽春を先取りした季節感、民族特有のものであろうか。

新芽が萌えて出る頃、例年の様に、野鳥が一羽二羽と寺の小庭にやって来る。中庭のみじの古木の岐枝に、とり残された小鳥の小さな丸い空巣だけが、葉のきれいに散った後で見つかったのだが、今は昨秋の名残りとして中空に懸っている。その下の日当りのあまり良くない庭には、千両・万両が赤い実をつけて一きわ鮮かであるが、これが毎年忘れずにやって来る野鳥にみんな食べられてしまう。追払ってもどうしても執拗に食べ尽

すまで止めるものでない。その点、裏山裾にある、たった一本の梅の木に、これも定期便で訪れて来て美声を聞かせてくれる鶯は、招いても庭へは降りて来ない。そんな様なことで、田舎町の寺にも自然の春は巡って来るのである。

春の便りという標題は、人為現象にも符合する節がある。

闇雲低迷の状況から、機縁熟して、晴天恢復というような時に聞かれる言葉でもある。浄土宗は祖山問題で昨年中、もやもやしていたのが、年末に漸く解決して正常に帰ったことを、華頂山に春蘇ると人は言い、宗門は希望の春を迎える、と宗教紙は報道していた。まことに希望的展開を意味する、春の便りである。

既成の伝統教団であるわが浄土宗にも、春の待たれる幾多の問題が介在していることは、宗門に心寄せる幾多人士の斉しく感ぜら



れるところである。

浄土宗の新内局が教線伸長のうえに、一步前進の姿勢を示されんことを期待するものである。

もう一度本筋に返って、春の便りの実録を一つ紹介させていただく。

この正月の元旦に届いた年賀状であるが、そのまま「春の便り」として掲載していただくのに恰好な一枚と考えたからである。

発信者は、宝塚市にお住いの北風孝様というお方である。現在、阪神貨物自動車(株)の社長で、念仏の篤信者でもある。また私にとって、少年時代よりの畏友であることを附け足して置く。まことに僭越ながら左記にその賀状を一字違わず、そのままにて掲げさせていただきます。

.. ..

謹みて 新春のご祝詞を申し上げます。

慈光合掌

おかげさま 去年仲秋に古稀を迎えさせていただきました。この新春を わが人生の大いなる節目として、こころ新たな再出発を希っています。

続けて十七回、み恵みを得て今年もまた、元旦から四日朝まで比叡山飯室谷の念仏道場で新年を寿ぎました。本年わが阪神貨物自動車(株)、西宮運輸事業協同組合の画期的な前進の年であるよう念願し、生かされて 活きんとする私は「使命を觀じて人事を尽す」ことを誓いました。

どうぞ倍旧の教導とご愛顧を 心からお願い申し上げます。

ご慈光の裡 ご一家皆さま方の無事を祈念しつづけさせていただきます。

.. ..

合 掌

以上、長い文句の年賀状と思われるでしょうが、活版刷りですから、多くの方々へも同じ賀状が届いている筈で、実にこうした賀状がもう二十年余も毎年のこと、信仰味あふれる年頭の詞として送られて来る。実にすばらしい新春の便りである。

また私も寺院住職からいえば、立派な念仏信者であり、在俗の教師と言いたい方である。文面にもある通り、毎歳正月元旦より四日まで山中道場に籠りて、大念仏を高唱すること十七年間の不断継続ということは、余程の信念実行の人でなくては出来ることでない。またこの別時行には家族の理解もなくては、かなわぬことであるが、それが亦この一家は奥様はじめ子女の方々まで、一家そろった念仏家庭である。

北風さんは今、古稀を迎えられても、なお数々の要職を務められており、その企業経営の心ぐみはすべて念仏精神で一貫されておることを、斯界の企業ニュース等でも報告され

ている。そして請縁あれば仏教団体の奉仕活動から、講演の席にも出られる。この人を今日あらしめた入信の動機から、行歴、逸話等について語れば、とても長くなるので、本文の賀状についての添言はこれにて攔ぐ。

寺に住まいて、訪れる春の便りは種々雑多、悲喜交々の娑婆相を觀するが、念仏の中に頂くその心は、すべてを如来よりのお指図と受取りて、日々我が人生の務めの糧と為したいものである。

昨年七月の山陰地方を襲った豪雨災害で、特にひどかったのは、石見の西部地区で、百十七名の死者を出すという大惨事であった。これが新聞、テレビ等で全国放送されると、あらゆる救援措置が採られ、温い援助が全国各地から寄せられたことは、真に有難いことであつた。私も被災地区住民の一人として、心から感謝感動し、機会ある度に、深謝の辞

を陳べて来たが、なお今後共、念仏者の一存としては、列島に住む同胞は勿論のこと、広く法界に到るまで還相廻向の思念をもって報謝の微分なりとも尽して行かねばならぬものと存念した次第である。

災害の復旧作業は着々と進んではいるものの、激甚災害対策法の枠外にある崖崩れや山道の決壊等の修復は、未だ何時のことになるのか見当もつかない。

たった一日だけの記録的の豪雨が、人間生活の根底をゆるがす変動をひき起すということ、大自然の力のまえに、人間はもっと謙虚に対処しなければならぬと思う。災害の起る度に議論されることが、天災か人災かの問題だが、人事を尽して天命を待つ古訓を改めて再認識することの必要を痛感する。

私の自坊も大雨の降る度に憂慮されることだが、伽藍が百数十年を経た建造物で、特に庫裡は古朽が激しく、幾度か改修を加えて来

たものの、もう限度が来てるので、この一月の総代会の会合で、今春は愈々解体の運びにまで協議が進んだ。これも矢張り昨年の災害に縁由することでもあるが、逆縁を転じて、復興の春が待たれるものである。

災害に明けた本年二月一日、わが石見教区の浄青会員の一行二十名が、二週間の行程で印度・ネパール仏跡巡拝団として出発する。その中に一人、教区会議長の本田行晴師が同行する。これは一年前の昨年当初に計画され、毎月各寺を廻り持ちで、積尊の六大聖地や經典の輪読研修等、用意周到に検討し実行されるもので、むしろその出立に至るまでの過程における、浄青会員の意欲と情熱に感心させられたものである。

積尊降誕の大地に、自らの足跡を残して帰る新生の浄青教師達が、明日への教化推進の為、得難い沢山の法宝を土産に、快い春の便りの聞けるのも間近いことであらう。

寄稿

私自身のこと

— 仏教的生き方を求めて —

みどころち
御堂河内
しいち
四市

自分自信のことをいささか記させていたきたい。七十歳を越えた今、ともかく仏教のことを少しばかり勉強させていたきながら、日々の生活をゆくりなく送っている。この欄をお借りして、自分のことを改めて願ひみて、仏教的な生き方をこれから実践して行くべく努力してみたい。

私は兄三人姉三人の七人目の末弟で四男。私の父は、

私より二十一歳上の長兄のために始めた事業に失敗して倒産。田畑山林家屋敷家財道具その他財産一切を競売、全くの裸となった（小生小学五年生の終りころ）。六年生に進級すると図らずも級長に任命されたが、同級生中に父の債権者の息子が数人いて、「詐欺師の子」と言つて毎日私をイジメ、教室内では「送り」と称して後部席から背中にゲンコツを打ち込まれ、私は涙の乾く暇もなく、何度も級長をやめたい、と担任の先生に申し出たが、その都度慰留されて六年生を卒業。高等小学へ進学したが、大

正七年卒業と同時に呉海軍工廠の見習職工（日給十八錢）となり、夜間中学—三年制—に入学。大正十年卒十一年春呉工廠を退職。横浜で新聞配達しつつ神奈川県藤沢市の藤沢中学四年に編入。十二年九月一日の関東大震災にあり、郷里の広島県佐伯郡津久茂村（現安芸郡江田町津久茂）に帰り広島市の広陵中学四年に転校。翌年四年修了で大阪千里山の関大に入学。新聞配達、家庭教師、大学の講義をプリントして同級生に売り付けて学費等を稼ぎ、昭和五年春関大法科卒。朝日新聞大阪本社に入り、福井支局を振り出しに各地に転勤。二十年四月徳島支局長から福井新聞社へ出向。七月十九日夜の福井空襲にあり、八月十五日終戦。十一月十三日開拓者として、高女四年と二年の娘二人を中退させて現住所に入植し、今日に至っている。妻と二人の娘に心で手を合わせて感謝しているのである。

長男以下男女七人の子は全部二十年かかって県立大野高校卒。更にアルバイトで長男は近畿大商科卒。次男は大阪市立大商科卒、朝日新聞入社、現在京都府宮津通信局長。三男は広島県庁農政部勤務。四男は京都府巡査から、福井県と京都府警両本部長の話し合いで福井県巡査

に転じ、現在福井署勤務巡査で、今年の大雪には四男が福井から来て、三回も四回も屋根雪を下してくれ、妻と共に感謝している次第である。

最初私は仏教のブの字も知らなかったが、現在は京都の仏教大学通信教育部仏教学科を七十四歳の秋卒業したおかげで、生かさせてもらって生きている喜びを味わさせていたただける次第である。

仏教大学卒業の時、僧侶になるつもりで妻に相談した所、僧侶になるのはイヤだと言われ一家の平和のために、僧侶にならずに、現在も仏教のことを引き続き勉強している。

子供七人の内五人まで大野市の人と結婚。孫も十九人となり、遂に大野市を離れられなくなりました。

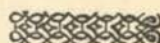
開拓地入植の時、高女を中退した二人の内、妹は東京の大妻女子短大卒、現在大野で学校の先生を勤めている。

ともかく老いて今、仏教の中に私自身の生きる糧を見出し、私自身なりの老後の生命を勉強精進に向けて歩み続けようとしているのである。

浄土句集



一田牛畝選



京都 岩井 伏水
もみじ散る通天橋のうえしたに

福岡 安藤平次郎
出張の家ごと小さき師走かな

東京 吉田ゆきゑ
石段の踏みへりし寺冬牡丹

評 京の通天橋は紅葉で有名で、橋の上下の紅葉は美しい。そして散っている紅葉はこの世の極楽のようで何とも言い得ない景色である。

評 師走ともなれば、出張しても可愛い子や妻に色々な土産も買いたくなるが、土産の品物をさがす時間もないので、品物も少ないため土産も小さい袋となっているのである。

評 石段が参詣人のために踏みへっている。寺も大分古いらしい。そして冬牡丹が咲いている。如何にも由緒ありそうである。

福岡 荒牧 亀齡
胃の手術されど生かされ老の春

山形 松田 光誓
庫裡の前堂裏までに雪丈余

山口 上野 明達
初詣経寺族揃ふてお念仏

評 胃の大手術とは、年寄りなれば嚙ぞかし心配の事であつたと思われる。されど手術の経過もよく、快くなられて新しい年を迎えられたとのこと。嚙ぞかし神仏の加護に依られしことならん。

山形 松田 光誓
庫裡の前堂裏までに雪丈余

山口 上野 明達
初詣経寺族揃ふてお念仏

山形 松田 允子
おごそかに法主まず打つ除夜の鐘

評 丈余の雪が本堂の前にも裏にも積っている。雪国でない人には美しく珍しいことと思われるが、この地方の人は雪には大困りらしい。

評 いつもの法要の時には、寺族は忙しく本堂に詣り、お念仏を称える事が出来ないが元日となれば、住職の後に寺族が坐って皆で木魚たたいてお勤めすることが出来る。一年中本尊様の御守護を願っているその相は、誠に有難いものである。

評 法主さまが一打一礼して除夜の鐘を撞かれている姿は尊いものである。沢山の

評 丈余の雪が本堂の前にも裏にも積っている。雪国でない人には美しく珍しいことと思われるが、この地方の人は雪には大困りらしい。

評 いつもの法要の時には、寺族は忙しく本堂に詣り、お念仏を称える事が出来ないが元日となれば、住職の後に寺族が坐って皆で木魚たたいてお勤めすることが出来る。一年中本尊様の御守護を願っているその相は、誠に有難いものである。

評 法主さまが一打一礼して除夜の鐘を撞かれている姿は尊いものである。沢山の

人が、その後で撞かせて貰うために待つてゐるに違ひない。

福岡 上滝津弥音
主婦の座にありたる頃の師走ふと

山梨 青山富貴江
初釜のふい、さばきの聞えけり

福岡 原 敬二郎
急患に徹夜の医師の大晦日

福岡 服部 光代
次々と浮きて水尾引くか、いづり、

広島 皆本浅茅路
丘の墓地参詣人に鳥渡る

福岡 行正一如子
風邪召すな体大事と見舞状

群馬 島津 か寿
血縁の誰よりも生き初詣

三重 山田 歌甫
黄落や七堂伽藍は風の中

福岡 林 澄山
御法主の法衣を脱いで炬燵かな

三重 森 静枝
お身拭僧になるやも知れぬ子と

熊本 山崎 石庭
山茶花の落花をさそう雨となり

大分 丹羽 難中
年回忌くりだす寺の年の暮

京都 安川 彬光
御老師の年賀めでたき俳句かな

熊本 山崎 松子
あの丘に父母の墓あり秋の風

福岡 権藤みきを
木枯らしにせかれ浄土へ急がるる

福岡 青柳 良巖
菊日和御堂は詠唱の熱氣満つ

熊本 山崎遣迎子
枕木を積める駅裏野菊咲く

福岡 前田 秀峰
開山忌寺苑にひびく蟬時雨

東京 岩沢 正義
ふつくらと飛石抱いて芝枯れぬ

福岡 沢河野ねはん
氷張る野辺の地蔵に水そそぐ

福岡 山崎 鬼川
先師の句席に飾りて初茶の湯

長野 友洲旋風子
玉を撃つ音かん高き冬の芝

樺島日に一便の通ひ船
一田 牛畝

詩集紹介

霧林道義詩集『平地林』

—平地林の中で言葉を探す、

穏やかな人生のたたずまい—

私にとって、詩集を読むたのしみは、まずもって、詩集を読むというか、詩集を鑑賞させていただくというそういう時間、余裕のある時間をもてたという心の充足感からくる身心全体の快い生命のリズムといったもので表現される。豪華装本の一ページ一ページを、そう、ゆとりをもって慌てずに、騒がずに繙(ひもと)いて行く。むかしどこかの旅行で買い込んだ、ちょいとアンティークなシャレたペーパーナイフなどを、必要もないのに側に置いたりしてみたくなる。なんともおおらかな余裕綽々(しやくしやく)といった一字一字の活字。手ざわりのしまった贅沢を、控え目に施した一枚一枚をめくるページの紙質。なによりも表紙の装本のシックな凝(こ)ら

し方がたまらない。——ああ、こんな時、こんなゆとり満ちたくつろぎの時、せめてこの場所が殿(でん)とした書斎の一室でもあったのなら……。

改めて現実(げんじつ)にわれを帰して、それにしても日々の生活に追われて、私たちは読書する余暇さえも見出しえない。時間と月日を切り売りして、大切な私の生涯をなんとまあ忙しく、せせこましくしてしまっていることか。詩集を味読する時間も、電車の中の通勤ラッシュ、喫茶店での時間つぶし、駅の改札口や広場のベンチの人待ち時……とは、この豪華本(ごうかほん)があまりにも可哀(かな)そうだ。だいいちこの詩集に結晶(けっしょう)された心の世界を、根こそぎふみじめるようなものだ。それにつけても、私たちの忙しい生

活ぶりが今更ながらにくやしい。



ところで霧林道義詩集『平地林』は、決して分厚い大詩集ではない。それこそ控え目なひそやかな詩集である。元来、詩というものは、人間の感性と、その躍動する生命を言語の中に刻み込んで、私たちに鋭い指摘と新しい視座、あるいは心の止揚を働きかける崇高な営みである。私は、今、自分がこうして詩の世界に浮遊した時、この『平地林』の中に込められた、忘れたたい詩語を集めて、広く読者へのおすすめの言葉としたい。

「優しみの ころは／いつも広々としたかなしみに／色どられていく」「卵のひびきを／己のひびきと感じとろうとして——」「空は／かぎりなく深む」「枯れた葦群に／秋の日がひかっている」「おまけに空想ばかりが羽搏いて／だんだんころが虚になっている」「人は動くこともせず、そして黙っていると／何故か無力感の如きものに包まれてきます。」「いつでも ひとりだと思っている男よ／君の そのかぶっているものは／一体なんとなづけたらよいのだろう」

最後に、この詩集の中でもっとも注意すべき一篇、「虚空」の一節を紹介しよう。

そして 太陽には

自在に その光を放たせる

けれども

そのものは いつも

自らの広がりの中に広がっているばかりだ

霧 林 道 義 著

詩 集 『平 地 林』

変型A5版 七〇ページ

定価一五〇〇円（千二百五〇円）

人 生 道 場 出 版 部 刊

——お問い合わせは、（〇三）二六二—五九四四

法然上人讃仰会事務所まで——

● 現代詩コーナー……

笑っていてほしい

坂^{さか}田^た文^{ぶん}三^{ぞう}

いきおいをつけて 走ってくる
いきおいをつけて 声を発する
笑っていてほしい いつまでも 笑っていてほしい

私の こども
涙を浮かべた顔 激しい泣き声を聞くと
父さんは とても かなしい

＜『浄土』誌に連載された大長篇歴史小説＞

待望の本格／＼仏教／＼歴史巨篇／

毎日新聞社から好評のうちに全五巻発売中！！

念佛ひじり三国志

——法然をめぐる人々——

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻（各巻定価一三〇〇円 千各二五〇円）

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

第三十七回 毎日出版文化賞受賞

毎日新聞社

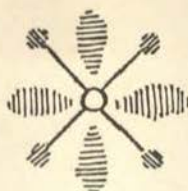
〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一

振替（東京）四一五六五三四

エ
ッ
セ
イ

早春三題

—伊豆高原徒然草より



一月の半ばを過ぎて、東京地方は三度大雪に見舞われた。大雪といっても北陸の豪雪地帯の雪には比ぶべくもないが、交通が途絶したり、転倒者が続出して救急車が走り廻った

木の
下
隆
一

(随筆家)

り、郊外の団地などでは、いくつもいくつも大きな「かまくら」が造られたりしたのだから、大雪には違いなかった。初雪が根雪となつて、その上に更に降り積もった雪がまだ十

センチほど、半月以上たつたいまでも、消えずに残っている。

この冬は寒くなるな——という予感が私にはあった。暮に伊豆へ帰った時、朝庭に降り立つと、足許の土がぐしゃつと崩れて思わずひっくり返りそうになった。落葉の下に五、六センチの霜柱が立っていて、砕けた結晶が朝日にキラキラ輝いていた。落葉の下に霜柱が？……温暖な土地なので、ちょっと信じられない思いだった。地表は想像以上に冷え切っていたのである。暖冬だった一昨年は暮の内に早々と落の藁が顔を出し、松の内を過ぎた頃には半ば呆けているものも見られた。いささか狂い咲きの感無きにもあらずであった。句帳を繰ると、五十三年には二月の初旬に、五十五年は二月中旬、五十六年は二月下旬に落の藁の句が書きとめてあるから、一句も作っていない五十四年も五十八年も大体二月初旬から中旬にかけて生まれていたものと思われる。

いつだったか、春の終りの頃、道端から掘り採って来た落を我が家の庭に植えた。自家製の落の藁を味わってやろうと思ったのである。長い地下茎を垣根添いにいい加減に埋めておいたら、夏の間は貧弱な葉をひろげていたが、いつの間にか姿を消してしまった。秋の終りに入れた庭師が始末したのでらうと、あまり気にもとめなかった。冬場落は枯れてしまうということを、迂闊にも私は失念していたのである。それきり落のことは忘れていたが、その翌年一月の末に東京から帰ってみると、二つ三つ小ぶりの落の藁が僅かに土をもたげて頭を見せていた。

「おお生きていたか」と、一つ摘み、早速刻んで味噌汁に散らして賞味したが、春が来たノと感じるほどの味ではなかった。生野菜に乏しい北国と違って、何かと食べ物に恵まれ過ぎている南国では、春を迎える喜びを落の藁に求めなくても、春の訪れを感じる物は身辺に事欠かない。贅沢過ぎて申し訳ないよう

なものである。その夜、無沙汰続きの匂友に葉書を書いたついでに、落の薑は味わうよりも目で楽しむもののように、と付記した。瀬戸内に住む友は、私の言わんとしたことが判ってくれたことと思う。

さて、三度目の大雪が降った翌日、買物から帰って来た女房が、

「野菜は荷がはいらないのか、なんにもないの。でも春らしいものがあつたから買って来たわ。判りますか？　これ」

と、紙袋からバックされた物を取り出して見せた。

「落の薑じゃないか」

と言ったものの、常識的な落の薑とは似ても似つかぬ代物だったのである。

「地中から掘り出したんだろなあ」

「ハウス栽培でもしてるのかしら」

「多分ね。でも少し可咲そうな気がしないか？　せめて地面に出るまで生かしておいてやりたかったな。しかし、いい値段だなあ」

そのバックには信じられない高値の札が張りつけてあった。

「どう料理しますか？」

「天麩羅か、そのまま油の中に放り込んでもいいだろう。野草ってのは油を通すとアクが中和されるから」

我が家の庭の落の薑は、今年はいつ頃顔を覗かせてくれるであろうか。凍土を割って現れる生命あるものに、私は驚異を感じると同時に敬意を払いたいと思うのである。



何かのテレビ番組のタイトルバックに、麦踏みをしている老婆の姿が映っていた。いまだき珍しい風景であった。遠く雪嶺を望む平野の一画、私の想像では北関東のどこかであろうと思われるが、畠に雪が無いところを見ると、去年のフィルムかも知れないし、私の

場所設定が間違っていたのかも知れないが、麦踏みという作業が無性に懐かしかったのである。

昭和十九年から二十年にかけて、松山中学の一年生だった私は、出征兵士の留守宅へ援農に狩り出された。農村に男の姿はほとんど無く、老人と女子供が細々と農業に従事していた。その点では三チャン農業といわれる現在とあまり違いはない。短い期間だったが、この時私は農業の仕組みのあらましを教わったように思う。稲刈りから脱穀までの手順、麦蒔きの準備のための秋耕、堆肥の作り方、施し方等々、数えあげたらきりがながい、忘れてしまっていることも多い。牛の扱い方を教わったのもこの時だった。その頃の農村では稲の裏作に麦を作るのが当り前のことだったし、いまのように土地を無駄に遊ばせることは許されなかった。麦作に適さない半湿田にはレンゲが蒔かれ、花は私たちの目を楽しませてくれたあと、緑肥として鋤き込まれて

稲を育てることになるということも、この時知った。

昭和二十年の二月、私はその農家を訪ねた。秋、仲良くなった牛に会いたかったのと、姑と嫁の二人だけの家庭のことが気になって、たいしたことが出来るはずもなかったが、手伝えることがあれば手伝ってあげようと思ったのである。昼過ぎに着くと、家には嫁さんだけがいて、庭先で小豆を叩いていた。

「小母さんは？」

と聞くと、

「裏の畠で麦踏みをしています。……秋にはいろいろお世話になりました」

と、頭を下げた。

裏へ廻ってみると、姑さんは腰に手を当てて、僅かにのびた麦の芽を細かく丹念に踏んでいた。並んで麦を踏みながら、私は姑さんからまた新しい知識を得た。

麦の増収をはかるために麦踏みは不可欠の

作業であること。これによって麦の徒長を防ぎ、株の分蘖を促す……。

「夏、田圃でする田掻き草取りとおんなじ理屈ぞなもし。手入れをすればするほど、良い物が穫れます」

姑さんは言った。

あれから約四十年。国策とはいえ、農民は畠を捨て、麦類は専ら輸入に頼っている。変な世の中になったものである。手入れをすればするほど、良い物が穫れます——といった心意気は失われてしまったのであろうか。真夏の田掻きも真冬の麦踏みも、決して楽な作業ではないが、いま黙々と麦を踏んでいる老婆の背後姿に、私は無言の呟きを聞いたように思った。

それでもやらなければ……。いい物は穫れないよ！

テレビの画面は徐々にロングに引かれ、それにつれて老婆の姿も小さくなって行った。老婆の姿が野末の一点となった時、画面はフ

エイド・アウトした。



昭和五十七年二月二十日付けの朝日新聞朝刊に、「スギ花粉症新薬」という耳寄りな記事が出ていた。というのは、春先にきまって私はスギの花粉に目をやられるからである。しかし、記事は「スギ花粉症」のくしやみ、鼻水、鼻づまりによく効く噴霧式治療薬がこのほど新薬として認められ云々と、スギの花粉によるアレルギー性鼻炎症状を抑える新薬の紹介であって、私の期待は裏切られてしまったが、考えてみると、スギの花粉によってアレルギーを起こすのは、目よりも鼻の粘膜をやられる人の方が圧倒的に多いはずで、ひどい人は気管支を冒かされて喘息症状に苦しむというし、この季節を嫌って北海道へ疎開する人もあると聞いている。それに比べると目をやられる人の率は少ないかも知れない

が、それはそれでやはり憂鬱なものである。
私の場合、先ず右目の縁が痒くなり、こすっているうちに結膜炎の症状を呈し、やがてそれがそっくり左目に移る。毎年同じ経過を辿るのが不思議といえは不思議だが、眼科医の治療を受けても全治十日はかかる。予防すればいいじゃないかと言われるが、スギの花粉がいつ散り始めるか予測出来ないのだからまず無理で、はっと気づいた時にはもう罹ってしまっているのであるから始末が悪い。

私にこの症状が出るようになったのは、伊豆に住むようになってからであるから、天城の広大なスギ林から強い西風に乘って飛んで来る花粉が元凶だと思っている。

新薬は鼻専用が日本グラクソ社の「ベコナーゼ」、喘息用をアダプターで鼻にも転用出来るようにした塩野義製薬の「アルデシン」の二種で、副作用も少なく手軽に使用出来るが、医師の指示に従うよう定められている。これらの薬が、ブタクサやセイタカアワダチ

ソウその他の植物の花粉や種子によって起るアレルギーにも効果があるとなれば、悩める者にとっては大きな福音である。

スギの花粉が飛ぶ季節が近づくと、私は毎年この記事を思い出すが、この種のもののは紹介だけで後を追ってくれないので、これらの薬が現在使用されているのかいないのか、さっぱり判らないのが私には不満である。

異常な寒波が波状攻撃をかけて、日本列島を冷やし切っている今年は、春の訪れはかなり遅れるものと思われるが、スギの花粉はいつ頃飛び始めるのであろうか。何とかその時期を予知して、私は伊豆を敬遠し、東京に居坐っていいように思っている。

杉の花咲く頃我の目病みぐせ

(了)

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』三月号をここにお届けいたします。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、新登場の小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵が、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振替(東京) 八―八二―八七

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十巻 三月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和五十九年 二月二十五日 印刷

昭和五十九年 三月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒〇三 振替東京八―八二―八七番

(新)

(刊)

『生活の倫理』

著者 大正大学教授
宮林昭彦

B 6 判 一九四頁 定価二二〇〇円 (千二百五〇円)

◎春の章・夏の章・秋の章・冬の章・法の章——五章よりなる宗教的エッセイ。季節感に富んだやさしい滋味深い文章が印象的かつ感動的!!

◎『浄土』誌の愛読者諸兄にも必ずや感銘をもって、読後の穏やかな人生観照となることであらう。広くおすすめしたい。

(発売) 千102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

大 道 社

電話 (〇三) 二六二―五九四四

振替 (東京) 一―八二四七

第五十巻

三月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十九年二月二十五日印刷 昭和五十九年三月一日発行